

十四 鯨回向

日本地図を眺めると、国と呼ばれた佐渡と隠岐を別格として、本州北岸には大きな島が少ないことに気づく。近畿地方以西で最大の青海島は山口県の北岸にある。たいして大きな島が、東西に横たわって南に広い湾を形づくっている。その地形からこの地方に大津郡という郡名がつけられたのだろう。北からの風をさえぎる良港で、現代でも台風の際に外海を通過中の船の避難場所になる。南からこの島に向かって洲崎が伸びて百メートルぐらゐの瀬戸になっている。ここに小さいながら古代の円墳が築かれ、江戸時代に北前船の航路が発達すると、瀬戸崎に船番所が置かれた。この湾が昔から人間の暮らしを条件づけたことが分かる。

東側が大きく開いた湾には、島の沖を流れる対馬海流から生き物が回遊してくる。動力船による近代漁業が盛んになる以前には、マグロが回遊してきた。イルカや鯨も入ってきたので、島の東端の南岸に位置する通（かよい）で捕鯨が行なわれた。組織された鯨組を萩藩が管理するようになったのは十七世紀のこと。何十人もが網で鯨をとり囲んでしとめるのである。鯨一頭獲れば七浦うるおうという言葉があるように、捕鯨は重要な産業で、通

浦だけでなくその余得は近隣に及んだ。湾内のほかの浦でも鯨やイルカを獲ったようだ。わたしは中学生の頃、通の隣の大日比で数十頭のイルカを浜辺に追いこんで、なぎなたのような刃物でしとめ、渚が血の色に染まるのを見た。

その湾の奥にあり、藩政時代にやはり浦の名で呼ばれた集落に、わたしは暮らしている。集落は旧暦の正月に年に一度総会を開く。昔の言葉を使えば地下(じげ)の初寄合という。市の末端行政区分いわゆる自治会が別にある今でも、古くからの共同体の組織が続いているのである。かつての共有地は、資本主義の現代では財産として運営費を生み出している。財産管理組合という側面が強くなったが、自治共同体としての昔の集落のさまざまな働きも含みもつ。たとえば、近隣一円の氏神に当たる八幡宮の傘下にあつて、その行事に参加する。だから、共同体に属すれば、氏子としての役割分担を逃れるのはむずかしい。神社に参拝しないわたしも、三年前に六人いる字(あざな)総代の順番が回つてきて、八幡宮の行事を手伝った。昔の風習のなごりを追体験して、知るところがあつた。

今年は、初寄合の投票で、九人いる寺の世話役にされた。この寺というのが特異な設立の仕方をしている。この地方では必ずしも集落単位で一つの寺へ所属しない。わたしの集落の家々は近隣の五、六か寺の門徒になっている。つまり、みんな浄土真宗の門徒である。

信仰心篤かったのだろう、江戸時代後期に集落の中に住持もいる寺を建てた。集会所としても必要だったのかもしれない。各家の過去帳のある本寺とは別に、集落持ちで維持する。だが最近、いやがらずに世話役を引き受ける人が少なくなり、投票して選ぶようになった。選ばれれば、信仰心の有無にかかわらずその役目を逃れられない。講師を招いて法会があるとき、男は受付で御法札を収納するぐらいだが、女性は出席した人たちのために簡単な昼食今では弁当の準備をする。念のために言えば、法というのは仏法のことである。寺で法座のある日に五色の旗が立つことは前から知っていた。現代人は虹の色を七色と言うが、古来中国や日本では五色が基本色だった。どうも西洋でも昔は五色だったらしい。先日、旧暦四月の年中行事の法会で知った慣わしは、講話の開始を知らせる半鐘を、乱打をはさんで七打・五打・三打と打つこと…。閑話休題。

海辺に暮らす人間は海からの恵みもいたいて生きるのだが、鯨やイルカを捕獲すれば、ほかの魚介類と異種だということに気づく。腹を裂くと胎内に子のいることがある。四足の動物を食べなかったこの地方では、強い印象を与えただろう。鯨は人間との類縁を示すのである。殺生を禁じる仏教へ親しんでいた通浦で、捕鯨へのある反応が生じた。捕獲した鯨と胎児に戒名をつけて弔うようになった。今そこを訪れる人は鯨の過去帳と墓を目に

することができる。その心情は、鯨やイルカの捕獲にかかわる湾内の人々に共有される。鯨の回遊する湾に臨む浦々の寺で、鯨を吊って回向を願う法会を営むようになった。浄土宗の寺では「鯨法会」と呼び、浄土真宗の寺では「鯨回向」と呼ぶ。

わたしが世話役の一人として初めて出席した法会は、その鯨回向である。講師は、今日、浄土のことを話すと話題を明示して、親鸞思想の中心的な論点を語っていった。一文で要約すれば、『大無量寿経』の説く「人を救うという阿弥陀仏の誓願」を信じる、というテーマである。聴衆の注意を引きつけるために自身のエピソードをからめながら、しかし、昔の説教ではあっただろう下世話な話で脇道にそれることはなかった。本願寺布教師には、持ち寺のある僧のうち一定の訓練を受けた人になる。現代では、布教師の養成は制度的に整っているものと推察される。ものやわらかな調子が「信」の問題に入ると思わず強い口調に変わるところに、伝統的な説教の術が残っているのだろう。ともかく講話はよく構成されていると思った。前回から世話役を続けている人が二年前の話と同じだと言ったから、自分なりの完成形に練り上がった講話なのだ。鯨の回向を願うことを契機とする法会で、救われて浄土に往き、また還ってきて衆生を救うという、往相と還相の回向が語られたけれども、鯨という言葉は出なかった。それをとがめだてする必要はない、仏教という衆生は意味が広いのだから。

「信」に距離を置くわたしが法会につらなるのは矛盾である。ただ、どの世界宗教でも、説教は人を信仰に至らせるために説かれるのでもある。しかし、ゴータマ・シッダールタの「身体を感じ、感受を観察し、心を観察し、もろもろの事象を観察し……」という言葉で唱えるだけで、信仰に至るつもりのないわたしが寺の世話役になるのはやはり問題だと思う。けれどもわたしは、仏教が形成される前、アトマンは存在しないと考えた生前の彼の人を尊敬する。理神論的な思想に至ったスピノザは、キリスト教徒はもちろんユダヤ教徒からも無信仰者とされたのに、誰よりも敬虔に見えた。理神論からも抜け出て、理性に踏みとどまったカントには、なお救いたいものがあつた。現代の合理主義者ラッセルは、自由人の信仰という言葉である種の敬虔な態度を勧めた。わたしは、これらの善知識の拓いた道を進もうと思う。

今年の鯨回向の参加者はいつもより多かったということだ。それでも、世話役の人を含めて三十数人。集落の戸数二百数十にくらべれば少ない。いや、高度経済成長による変貌を体験した人々の中から、これだけの人数が聴聞に来るといふのは多いといふべきかもしれない。親の世代の暮らしぶりをよく見てきた人たちに、昔からの伝統的な生き方が埋めこまれているのだろう。近代以前の共同体に、農業や漁業や他の物資の生産と流通で暮ら

しを立て、四季の巡りに合わせ祭りを営み寺に参る暮らしがあつた。西洋でも同じだつた。そこに、現代にもつながる普遍的なものがあつたと考えることができよう。欧米では近代になつても日曜日に寺に参るといふ習慣は続いた。江戸時代後期、青海島には大日比三師と呼ばれる活動的な僧が出て、子供のための念仏会を開いたが、それはいわば日曜学校である。欧米由来の近代化によつて、日本の寺参りの習慣は早く弱まつた。

科学の発展とともに宗教が後退したのは、ラッセルが言うように必然である。科学的な思考が広まり、地域の共同体が変質した現代は、科学と直交する信仰を否定することはできないにせよ、宗教組織の存続はいよいよむずかしい。日本ではまだ初詣など神社に参ることが生活習慣になつてゐるが、世界宗教の観点から見れば、信仰からずいぶん離れてゐる。鯨回向の心情が残つてゐるこの地方でも、信仰に向かう人がどれだけゐるかと問えば、寺院にとつての困難が明らかに。江戸時代に成立した檀家制度に支えられて存続してゐても、前途は多難である。法会に講師を招く費用など維持費を集めることは、寺から遠ざかる人が増えているからたやすくはない。私営の斎場を使う人が増えているが、葬儀を仏式で営む習慣はくずれてゐないので、お布施は減りながらも入るのかもしれない。副業をもつ僧は以前からあり、近隣の寺はほとんど新築・改修を終えているので、当分の間は維持できるだろう。しかし、次に改修をむかえる時期にどれだけ寄付を集めることができる

か疑問である。状況の困難を、僧自身が懸念していることだろう。

二十一世紀、経済と社会の状況はいよいよ変化して、共同体はさらに変質しつつある。農業・漁業の縮小は誰の目にも明らかで、政府の糊塗する言葉もむなしく、われわれの社会はその流れを容認している。どの産業でも個人経営者は減り、大部分の人々が会社で雇用されて、その暮らしは自然の環境を実感しながら生きることから遠い。わたしの暮している集落に、留まっている青壮年は少ない。小学生は十数人しかいないだろう。おおよいで鯨を獲っていた通で中学校が廃校になった。豊かだった湾に臨む浦々の人口は、歴史上初めて減少しつつある。かつてない変動が共同体を見舞うのである。

経済の衰退期に入った日本で、共同体が試練を迎えているのと同じく、宗教も困難に立ち向かわなければならぬ。ところで、宗教に代わって、現代の世の人々の思考を左右しているのは、賢者の指摘するとおり、マス・メディアや広告などの組織である。二十世紀をふり返れば、この精神指導者は結局のところ経済の動きに追従する。だから、ふたたび増加してきた貧困や弱者切り捨てなどの社会的な問題を、表層をなぞるだけで本当にひき受けることはしない。宗教組織に活動の余地があるとすれば、今もそこにあるだろう。

鯨の回遊してきた湾には、海流に乗って夏みかんも回遊してきた。青海島に行けば、流れ着いた実の種から育てた原樹を見ることができる。幕末のことで、萩藩の武士たちも屋敷内に植えた。萩を訪れる観光客が観るのはそのなごりである。ちょうど秩禄を失った武士たちが生活の立て直しを模索する頃に栽培が広まったので、生計の足しにしたという話を聞く。けれども、十本足らずの夏みかで長く空腹を満たすことはできない。

進行中の変動に耐えぬいて生活できる共同体が存続することを願う園丁は、今年、まだ幼い数本の柑橘類からいくつかの実を収穫できるだろうか。